湯守の恋

aoneko

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
湯守の恋

【Ｎコード】
Ｎ５４０９Ｄ

【作者名】
ａｏｎｅｋｏ

【あらすじ】
父親の知り合いに預けられることになったこももの前に現れたのは緑の瞳を持つ浴衣姿の少年。しかも、預けれることになっていた家はなんと神様の来る温泉旅館で・・・。ちょっと強引な湯守の少年と心に小さな傷を負った少女の不思議な恋の物語。

第一話：湯守の少年

藍色の長い髪を一つに結って、若草色の浴衣を着て寝そべっている。手元には、水差しと甘納豆。

赤く薄い唇にうっすらと微笑を浮かべて、緑色の瞳で私を見ると、おいでおいでと手を伸ばす。

ああ、私はここにいるのだと。ああ、私はここにいていいのだと。

そんな風に笑うから、安心してしまうのです。

＊

改札を出ると、小雨が降っていた。初めてきた町だし、傘も持っていないからとりあえず、雨宿りをして待つことにした。

私の名前は、栗原　こもも。年は、十六。

今日から、この町にあるお父さんの知り合いの家に住むことになっている。

寂しい気持ちになるのは、雨のせい。お父さんや住み慣れた家と別れたからではない。

三年前、私のお父さんは再婚した。お母さんは私が七歳の時に他界していて、ずっと二人暮らしだった。お父さんが再婚するって言ったときは、驚いたけれどうれしかった。もう、お父さんは大丈夫なのだと安心した。

新しいお母さんである香夏子さんは優しい人で、私をすごくかわいがってくれた。だけど、私はどうしても懐けなくて、それが悲しくて申し訳なくてだんだんお父さんと香夏子さんと暮らすのが苦しくなってきた。そんなとき、お父さんのフランスへの転勤が決まった。

お父さん達は一緒に行こうと言ってきたけれど、私はフランス語なんて話せないし、不安だから日本にいたいと言った。

本音は、二人と少し離れたいと思っていた。もっと、大人になりたいと思った。

お父さんは日本に残ると言ったら、猛反対したけれど、私がどうしても言い張ったら、お父さんの知り合いの家に世話になるならいいと条件を出してきた。

私は承諾した。ふたりが悲しそうな顔をするのが辛かったし、夜中にリビングから聞こえた香夏子さんの泣き声と慰めているお父さんの悲しい声に胸を痛めた。

雨は強まるばかりだ。

私は駅の待合室のベンチに腰かけると、目をつむった。

『おい。おい。起きろ。』

肩を激しく揺さぶられて、私は目を覚ました。ぼんやりとしていた視界が明るくはっきりしてくる。

緑色の瞳と目があった。え？緑？

『きゃあ。』

私は飛び退った。見知らぬ男の子の顔が私の目の前にあった。

『御挨拶だな。』

男の子は、不機嫌な声を出した。

『すみません、ええっと・・・。』

私は戸惑いながら、謝った。この子はだれ？なんか、よく見たら浴衣姿だし、足は下駄？

『千家　古句（こく）。あんた、栗原　こももだろ？』

『あ、はい。えっと、千家ってことは。』

千家　国治。お父さんから聞いた私を預かってくれる人の名前。

『そ、俺は息子。雨降ってきたから親父が迎えに行けって言われてきた。』

古句と名乗った少年は、もう一度緑色の目で私をじっと見てきた。

ハーフなのかな。髪は真っ黒で、顔はきれいだけど彫りが深いってわけじゃないし。

『きれい。』

『へ？』

わあ、私今、口に出した？どうしよう。こっち睨んでいる。

『ごめんなさい。瞳が緑色できれいだなって。』

『・・・。俺の目の色が緑に見えるのか？』

古句は私の方にずかずか歩いてきた。き、気にしてることだったかな？私、もしかして地雷踏んだ？

『ご、ごめんなさい。』

私は後ずさった。

『見えるのか？』

古句はなおも緑の瞳でこっちを見てくる。

『はい。見えます。ごめんなさい。』

私は手に持っていたボストンバックをぎゅっと抱きかかえて、頭を下げた。怒鳴られるかな？ぶたれたりしたら、どうしよう。

『・・・。そっか。』

『え？』

古句はそれだけ言うと、私の隣にあったトランクを持つとそのまま、歩き出した。

『ちょうど、晴れたし、行くぞ。けっこう歩くからな。』

なんだか、拍子ぬけして私は歩きだした。

＊

千家　国治の家は小さな温泉旅館であった。一見するとただの家だが、掛札がしてあった。古句の後についていくと、山を上りだしたので驚いてしまったが、きれいに整備された石段を十分程上ると古い建物が見えたのでほっとした。掛札には大きく吾妻屋旅館と書いてあった。私が掛札を眺めていたら、古句が例の緑の目でこちらをじっと見て、やがて小さく呟いた。

『やっぱり。』と。

『初めまして、千家　国治です。こんな山奥までようこそ、こももちゃん。疲れただろう。』

そう言って、目を細めた優しそうな男の人を見て、私は思わず声を上げてしまった。

『ええ、あなたが？』

若い。若すぎる。下手したら、二十五歳くらいだよ。だって、古句・・君て私と同じ位の年でしょ。

そんな、私を見て国治さんは、ハハッと笑った。笑うと目じりが下がるかわいらしい笑い方だ。そういえば、国治さんも浴衣を着ている。いかにも旅館て感じ。

『ああ、先に古句に会っていたんだね。若くて驚いた？彼は僕の養子だよ。』

国治さんはさらっと重大なことを言ったので、私は少しドキッとして、古句を見た。

古句は何も言わず、階段の手すりに寄りかかっている。

『すいません。立ち入った事を。栗原　こももです。今日からよろしくお願いします。』

話を終わらせるように、私は勢いよく頭を下げた。

『うん、よろしく。古句、こももちゃんを部屋に案内してあげなさい。こももちゃん、夕ごはんは7時だから、それまでに温泉に入る

といい。そっちが浴室で、向こうが食堂だよ。今日はこももちゃんが来るから、お客さんを断ったから温泉は貸し切りだよ。僕はちょっと買い物に行ってくるから。』

『わあ、ありがとうございます。』

温泉が貸し切り？初めてだあ。

『おい、こもも。早くしろ。』

乱暴な低い声が、私の背後に響く。こ、怖い。それに呼び捨て。

『そうだ。親父。こももは「聞こえる」ぞ。早く話した方がいいんじゃないか？』

古句は思い出したように私にはよく分からないことを国治さんに言った。

『ほう。それはそれは。珍しいことがあるね。それじゃあ、食事のときにでも話しておこうか。』

国治さんが私を見てにっこり笑った。優しい笑顔なのに、なんだか少し怖くて私は会釈をすると、古句の後を追ってその場を離れた。

『ここがお前の部屋。隣が俺の部屋だから。』

古句は私を二階の一番奥の部屋に案内した。

ふ、襖だ。よく見ると、周りの部屋もドアはすべて襖。これってカギなしってこと・？

そんな私の心配をよそに古句は襖を開けた。

『わあ。』

中に入ると、私は思わず声を歓声を上げてしまった。大きく切り取られた窓からは、町が見えて窓のそばには小さなテーブルと椅子が置いてある。床は畳が敷かれ、純和風の旅館って感じがする。

『いい部屋だろ？』

そんな私の反応を見て、古句も心なしか嬉しげに言った。

『うん、最高。温泉も早く入りたいな。案内してくれてありがと。これからよろしくね、古句君。』

私はすっかり嬉しくなって、さっきまであんなに怖かった古句の手を取ってお礼を言った。

古句は少しの間あっけにとられていたけれど、やがてにやりと笑った。初めて見た古句の笑顔に私はぞっとした。

『ああ、そうそう。まだ言ってなかったけど、もう一つ良いものがこの部屋にあるぞ。ちょっと探してみろ。』

古句の予想外の意地悪な笑みを見た私は、動揺して手を離した。ぐるりと部屋を見渡しても、不自然な点は見当たらない。

『分からない。どうゆうこと？』

『うん、ヒントは襖。』

古句は戸惑っている私を楽しそうに眺めている。

襖？襖って入ってきたやつともう一つは部屋の横の壁になぜか一つ付いてるやつしか・・・。え？横？確か隣って・・・。

『まさか。』

嫌な予感。

私は部屋の壁に付いた襖を勢いよく開けた。

案の定だ。襖の奥には、私の部屋と全く同じ部屋が広がっている。ただ、少し違うのは、壁にかかった学ランと本のいっぱい詰まった本などが置いてあること。

間違いない。古句の部屋。

『部屋がつながってるの？』

私は悲鳴に似た声で叫んだ。

『うん。どう？うれしい？』

古句は意地悪そうな笑顔で私に向けてきた。

『やだ。私、国治さんに言って、部屋を変えてもらう。』

いやだ。部屋続きなんて。それにこの子怖い。

『無駄だと思うよ。それに今親父買い物に行ってる。』

古句は浴衣の袖に腕を通して、壁に寄りかかっていている。

浴衣の間から、古句の真っ白な肌が見えて、私は少しどきっとした。女の私よりずっと白い。やっぱりハーフなのかな。

私は怖いと思っているのに、なんとなくそんなことを考えてしまった。

『何見とれてんの？』

古句が私の視線に気がついて、にやにやしながら言った。

『ち、違う！私、温泉に入ってくるから。』

私は、着替えの入ったボストンバックを掴むと、部屋を飛び出した。

胸がどきどきする。やっぱり慣れない所に来たから疲れたのかな。

私はため息をつくと、狭い廊下をとぼとぼ歩きだした。

＊

吾妻屋旅館の温泉は、大きな内風呂と小さな露天風呂があった。私は、露天風呂の方が好きなので、体を流すと、早々に外に通じる扉を開けた。

『う～ん。』

湯船に入ると私は大きく伸びをした。一人で入れるなんて贅沢だな。ちょっと泳ぎたくなってきちゃった。

私はもうもうと立ち上る湯気の中、泳ぐほどの広さもない湯船で、バタ足をした。その時何か柔らかくいものが足に当たった。

『イタッ！』

小さな高い悲鳴が上がった。え？ほかに人がいるの？

『誰かいるんですか？』

私は小さな声で言った。湯気で視界がよく見えない。少しすると、そばで小さな話し声が聞こえてきた。

『ちょっと、あんた。珍しく人間がいるよ。』

『まあ、ほんと。こりゃ、どう見たって人間の足ね。国治さんたら、どうしたのかしら。人間のお客なんてずっととっていなかったのに。』

え？人間？私のこと？

私は声のするほうに手を伸ばした。すると、小さくて温かいものが触れたので、手に握ってみた。

『きゃ～！』

とたんに大きな悲鳴が聞こえた。

私は驚いたけれど、おそるおそる手に握ったものを自分の鼻先に持ってきた。

『リス？』

私の手の中にはリスが握られていた。

『今、しゃべってたのって・・・。』

『ぎゃ～。』

手の中のリスが叫んだ。間違いなくさっきと同じ声。

『ちょっと、あんた。この子あたしらの声が聞こえてるよ。』

『ええ、本当かい？』

私の胸のあたりにもう一匹のリスが泳いできた。

『ちょっと、お前さん。ひょっとすると、あんたは人間じゃないのかい？』

『きゃ〜。』

そう言いかけた手の中のリスの言葉を最後まで聞かず、私はリスを離すと湯船から飛び出した。

一目散に脱衣所に逃げ込み、そこに置いてあった浴衣を着ると、外に飛び出した。

今のなに？リスが話してた？私は頭がぐるぐる回っているのを感じた。

おかしくなったのかな、私。体も重い。視界がぐらりと揺れて真っ暗になった。

＊

『だから、俺は早く話した方がいいっていったんだ。』

頭の上で、古句の怒ったような声が聞こえる。

『ごめんごめん。今日はもうお客さんは残っていないと思ったから。まさか、仲居さんたちがまだ残っているとは。しかも、よりにもよって温泉で遭遇するとは。』

国治さんのなだめるような声も聞こえる。

ここどこ？

『んん。』

私は目を開けた。

『おや、起きたようだね。』

『寝すぎだよ。』

私は布団に寝かせれていて、国治さんと古句が私を覗きこんでいる。

『あの、私・・。』

私は体を起こした。頭がガンガンする。

『うん、廊下で倒れてたんだ。のぼせちゃったのかね。』

国治さんはにこっと笑った。その頭に手が伸びる。

バシッと音が響いた。

『そうじゃないだろ。ちゃんと話せ。』

古句が国治さんの頭を叩いたのだ。国治さんは涙目になりながら、

冗談だよと呟いた。

『こももちゃん、ごめん。』

国治さんはいきなり私に頭を下げた。

『え？あの・・・。』

『実はこの旅館のお客さんは人間じゃなくて神様たちなんだ。』

『へ？』

国治さんの口からでた言葉に私の頭は一瞬フリーズしてしまった。

紙？髪？神？？？

『おい、こもも。ちゃんと聞け。八百万の神って聞いたことないか？』

古句が私の肩を叩いた。

『あるけど。日本に昔からある信仰で、動物とかが神様なんでしょ。』

私はなんとか口を開いた。

『そうだ。うちはそうゆうやつらを相手に商売してんだ。』

『つまり、えーっと神様が温泉に入りにくるの？』

『うん。』

『な、なんか「千と千尋の神隠し」みたいだね。ねえ、これって夢？』

私はまた、ガンガン痛み出した頭に手をやった。

『夢じゃねえよ。』

古句は何とも残酷な台詞を吐いた。

『本当に悪かったね、こももちゃん。普通の人間には動物の姿に戻った時の神たちの声は聞こえないから安心してたんだけど、どうやらこももちゃんには聞こえてしまうみたいなんだ。』

『お前、見るからに鈍感そうなのに人は見かけによらねえなあ。』

気の毒そうな国治さんと感心したような古句がこっちを見る。

『あの、私はどうすれば？』

私は恐る恐る口を開いた。

『そうだね。こももちゃんはここに居たかったらいてくれていいし、気味悪かったら出て行ってもくれたらいい。君が決めなさい。』

国治さんはのんびりと言った。

きっと、ここを出て行けばお父さんにフランスに連れていかれるだろう。そんなの絶対に嫌だ。まだ、なにも変わっていない。

『・・ここに居させてください。』

『分かった。じゃあ、ウチの仲居さんたちを紹介しよう。雪さん。花さん。入って。』

国治さんは私の言葉を聞くと、手をパンパンと叩いた。

『はあ～い。失礼します。』

聞き覚えのある高い声が重なると、襖がすっと開いて二人の着物姿の女の人が入ってきた。二人とも雪のように白くて、かなりの美人だ。年は・・かなりいっている。

『あら、さっきのお譲ちゃんじゃない。』

右側に座っている青い着物を着た方の女の人が私の方を見て言った。

『ほんとだわ。あたしを湯船に落して逃げていった子よ。』

隣の紫の着物を着た女の人も同調する。

『え？私が見たのは、リスで・・。えっと、まさかと思いますけど、温泉で言葉を話してたリスさんですか？』

そう言った私を二人は黒い瞳できょとんとした目で見た。まるでリスみたいに。

『あらやだわ、国治さん。この子、あたしたちの声は、聞こえるのくせにそんなことも知らないのね。』

『こももちゃん。神様は普段、僕らの世界にいる時はこうやって人

間の姿をしているんだけど、温泉に入ると元の動物の姿に戻ってしまうんだ。』

『はあ。』

私は力のない返事をした。もう、これから何が起きても驚かないくらいんじゃないかな。

『な～に？国治さん。この子だめよ。いくら声が聞こえるからってやっぱり人間の子供なんて。』

青い着物の女の人・・もといリスさん？は私を見て不満げに声を上げた。

『そんなこと言わないでよ、雪さん。もう、この子のお父さんと約束したんだ。優しくしてやってくれよ。』

国治さんはなだめるように言った。青い着物の人が雪さんかあ。私は顔を覚えた。

『そうよ、雪ちゃん。よく見れば良い子そうじゃない。』

紫の着物の人が言った。さっきの人が雪さんだからこの人は花さんかな。私が湯船に落しちゃった人・・リス。わざとじゃないとはいえ、ひどいことしたのに優しいな。

『でも、国治さん。まだ、二十歳になっていない人間の子供をここに置いておくのは、少し危険じゃない？ましてや、この子は力も強そうだし。』

雪さんが今度は遠慮がちに口を開く。黒い瞳が心配そうに揺れている。この人も、別に私が嫌いで追い出そうとしているわけじゃなさそうだ。でも、何が危険なの？

『大丈夫だよ。雪さん。俺が隣の部屋だし。』

それまで黙っていた古句が口を開いた。

『まあ、そうなの。それじゃあ、安全ね。』

雪さんは安堵の表情を見せた。ちょっとまって。どこが安全なの？

『そ、そのことなんですけど、国治さん。私の部屋を変えてくれませんか？勝手を言ってるのは分かっているんですけど、やっぱりちょっと部屋続きってゆうのは・・・。』

こももはためらいがちに言った。

『あら～それはだめよ。』

国治さんが口を開く前に、雪さんが言った。

『こももちゃん。気持ちは分かるんだけど、それはちょっと無理なんだ。ここの温泉は良い神様が基本的なお客様なんだけど、中にはそうじゃない神様もいてね。こももちゃんみたいに神様の声が聞こえたりする子に悪さしたりするんだ。そうゆう人間も僕みたいに二十歳を過ぎれば、そんなこともなくなるんだけど、子供は不安定だから狙われるんだ。』

『でも、それだったら古句君だって同じじゃないですか。古句って

いくつ？』

『・・・十六。』

『ほら。』

『こももちゃん。古句は特別なんだ。彼は昔この山をおさめていた湯守の子孫なんだよ。』

『湯守って何？』

『今でいうと、その土地いったいの温泉の権利を持っている人かな。』

『ふ～ん。でも、何で特別なんですか？』

『昔、古句の祖先である湯守が八百万の神々と契約を結んだんだ。いつでも温泉に入りに来てもいいかわりに、神々と対等の力をくれってね。こももちゃん。古句の瞳が緑に見えるだろう。あれが、湯守である証。普通の人間には、古句の瞳は黒く見えるんだけど、神様や僕らみたいな人間には緑に見えるんだ。』

『つまり、俺の隣の部屋にいれば守ってやれるってこと。それから、君づけはむずがゆいから、古句って呼べよ。』

『え？』

古句が恥ずかしい台詞をあっさり言ったので、私は思わず赤くなった。

『あら、やだ。あんたたちお安くないわね。』

『まあ、ほんとね。おほほ。』

そんな私を見て、雪さんと花さんが楽しそうに笑った。

『そうなんだ、古句。いやあ、あてられちゃったな。こももちゃんは可愛いからね。』

国治さんも便乗する。

笑いの三重奏が響く中、私が古句をちらりと見上げると、古句は例の意地悪そうな顔で勝ち誇ったように笑っている。

本当は古句の方が悪い神様なんじゃないの。

大きなため息とともに、私の吾妻屋旅館での初めて夜は更けていった。

第一話：湯守の少年（後書き）

別連載「モネの森」を休止ようと思います。読んでくださっていた方は申し訳ありません。とりあえず、「リトルプラム」は続け、代わりに書きやすい一人称での小説を書いていこうと思います。初回なので、長めに書いてみました。もしよければ、御覧ください。

第二話：湯守の友達

緑の瞳が私を見上げ、藍色の髪が私の膝を流れる。

何か話をしてくれないかと問うてくる。

甘党のあなたですからね。

今宵の話は甘い甘い恋のお話にいたしましょうか。

あなたの寝息が聞こえるまで、私はお話を続けます。

たとえ、朝日が照らしても。たとえ、お天道様が一番高いところに昇っても。

私はあなたが眠るまで、そばで話し続けましょう。

あなたが私にそうしてくれたように。

＊

『こ、古句。ホントにここから行くの？怖いよ。』

足がガクガク震えている。足元を見ると、はるか下に家々が見える。

『何言ってんだ。遅刻するだろ。お前だって、転校早々、遅刻なんかしたくないだろう。』

古句はぶっきらぼうに言うと、私の腕を掴んだ。

体がフワリと宙に浮く。

『やだやだ。下ろしてよ～！』

私の悲鳴に似た声は、東間山中に響き渡った。

あ、東間山って昔は吾妻山だったんだって。だからね、吾妻屋旅館。

事の起こりは一時間前にのどかな朝食の時に起きた。

『こももちゃんの高校は、古句と同じだから連れていってもらってね。』

国治さんは味噌汁を啜りながら言った。

『そういえば、学校もふもとの町にあるんですよね？もう、出ないと遅刻しちゃうんじゃあ。』

食堂の時計はもうすでに八時を回っている。普通の高校って八時半からだよね。

『何寝ぼけてんだよ。昨日あんだけ寝といてまだ足りないのか？』

学ラン姿の古句はあきれたように私を眺めた。

昨日から古句には馬鹿にされっ放しだ。なによ。妙な所に来て、驚いてるんだからね。

『どうゆう意味よ。古句だってその寝癖どうにかしたら。それにイビキ。うるさくて眠れなかったんだけど。』

一見サラサラに見える古句の長めの髪は、実は猫っ毛のようで短い髪の毛が所々はねている。居候だから、イビキのことは言わないでおこうと思ったけれど、もう我慢できない。

古句は私の言葉を黙って聞いていたけれど、少しして赤い唇にうっすら微笑を浮かべた。

古句は綺麗だ。人間離れしている。だから、余計に怖い。

い、嫌な予感。

『ふ～ん、言うね。そういえば、お前も昨日部屋の窓から外見ただろう。まだ気づいてないのか？』

窓の外？ええ～と、町が広がってて、ずっと下の方に小さく家が見えて・・・・え？

小さく？

『あの、まさかここってかなり標高が高いんじゃ・・。』

私はおそるおそる言った。もう何があっても、驚かないと思ったんだけど。

『うん。ふもとまで歩いて下るとしたら、四、五時間はかかるねえ。』

国治さんが食後のお茶を啜りながら、のんびりと言った。四、五時間？

『どうして？昨日は十分位しか登らなかったのに。』

頭が混乱してきた。もういったい何なのこの旅館は。

『昨日は俺のは術。普通の人間が来ると思ったから、先に山にかけておいた。でも、もう解いた。歩くのかったるいし、術は疲れるから。』

『じゃあ、どうやってふもとに下りるの？』

私は不安げに言った。

『もちろん、近道で。』

『近道？そんなものあるの？』

『見れば、分かるよ。』

まあ、そうゆう訳で今に至る。

『もうやだ。下ろして。私、高いところから落ちるのはダメなの。』

やっぱり、古句は普通じゃない力を持っているみたいだ。現に私は

古句に腕を掴まれ、東間山の上空を飛んでいる。

もうだめ。私は目を瞑った。

『おい、ちゃんと目ぇ開けとかないとあぶないぞ。しょうがねえなあ。』

古句のため息が耳元で聞こえて、温かいものが腰に回ったのを私は恐怖のあまり気が付かなかった。

『おい、もう大丈夫だぞ。こもも。』

どのくらいの時間が経っただろうか。そう言われて、私は目を開けた。

目の前は真っ暗・・もとい真っ黒。私は古句の胸に顔を突っ込んでいた。

『きゃあ。』

私は飛び退った。そのとたん、固い壁に頭をぶつけた。

『なに〜。イタタ。』

頭をさする。

『何やってんだよ。狭いんだから、あんまり動くなよ。』

古句にそう言われて回りを見回してみると、どうやら私たちは建物と建物の間の狭い空間にいるようだ。

でも、なんでこんなところに。私はえっと・・古句に引っ張られて山の上空まで上って・・それで？記憶がない。

『そこの通りに出たらすぐ、うちの学校。道の真ん中に降り立つわけにいかないだろう。一応、人間で通ってるし。』

ああ、そうだ。学校に行く途中だったんだ。

『おい、行くぞ。』

古句は一人で納得してうなづく私をあきれたように見ると、手をぐんと強く引っ張った。

東間山のふもとにある青松町は、自然を多く残す東間山とは対照的にけっこう都市化の進んだ町だ。随分沢山のビルが所狭しと並んでいる。人通りも激しく、古句が手を引いてくれなかったら、はぐれてしまっていただろう。

かくして、私たちは県立青松高校の校門前に到着した。

古びた感じが好みだ。ちゃんと、校舎の真ん中に大きな時計が付いてるし。私は一目でこの高校が好きになった。

『行くぞ。お前は最初、教員室にいくんだろう。こっち。』

放心している私の手を古句が強く引っ張った。

『う、うん。』

ん、なんか視線を感じる。私は周りを見た。何人かの生徒がこちらを見ながら、なにやらひそひそ話している。なんだろう？私なんか変かな？

『おい、こもも。』

古句がまた手を引っ張った。いたた・・ってこれかあ。私は思わず、古句と繋いだ手を離した。

『なに？』

古句が怪訝そうな目でこちらを見た。怖い。この人なんでこういちいち怖いのかな。

『い、いや。もう学校に入ったし、大丈夫。ありがとう、繋いでてくれた。』

上手く言えたかな。早口になっちゃったし、ちょっと顔が熱い気がする。

『ああ。こもも、恥ずかしいんだ。』

古句は納得したように呟いた。くくっと喉を鳴らして、笑う。嫌な感じだ。

『やっぱり、これでいこう。』

古句はまた私の手を強く握った。私がうろたえるのを楽しんでいるみたい。

『ちょっと、離してよ。』

私は古句の手を振るほどこうとしているのに、古句は涼しい顔をしてぐんぐん私の手を引いて歩いていく。ものすごい力。さすが、人外パワーの持ち主。乙女としては、かなりトンチンカンな発想をしながら、私はすごすごと付いていった。

『やあ、君が栗原　こももさんか。僕が担任の福原です。ちょっと似てますね。はは。』

教員室に入ると、細身の眼鏡をかけた男の人がにこっと笑って、私に手を差し出した。ちょっと国治さんに似てる。私、優しい顔で笑う人がタイプなんだよね。こいつは論外。私はふてぶてしく隣に立っている古句を見上げた。古句は私の視線に気が付くと、フフンと鼻で笑ってきた。い、嫌なやつ～。

『いやあ、ちょうど良かったよ。千家君と同じクラスだったら、君も安心でしょう。何でも、彼のお宅にお世話になるとか。千家君は優秀ですから、何でも彼に聞くといいですよ。』

『はあ。』

安心。安心て。昨日からみんな口を揃えて言うけれど、こんな奴のどこが安心なの？優秀？大馬鹿の間違えじゃないの？

『こもも。顔に全部書いてあるよ。』

耳元で古句がささやいてきた。ホントにこいつは～。

『それじゃあ、二人ともそろそろチャイムがなるから教室に行きな

さい。栗原さんも先にクラスに顔を出すといい。千家君にクラスメイトを紹介してもらいなさい。転校生っていうのは僕、初めてなんだけれど、こうゆうことはまず生徒同士で済ませてほうがいいでしょう。あとで、僕も行って改めて紹介するから。』

おや、なかなかしっかりした考え方だ。一見風が吹いたら飛んでしまいそうな福原先生にちょっと感心した。

『なんだかさ。私、古句に頼ってばっかり。』

教員室を出た後、廊下を歩きながら、私は独り言のようにぼやいた。

『その方が俺にとっては好都合だけどね。』

『なにそれ、恩を売る気？』

『・・・・そうじゃないよ。』

『え？何？』

珍しく真剣な古句の声に、驚いて私は顔を上げた。

『お、この子が噂の転校生？かわいいじゃん。』

古句の返答を聞く前に、私の質問は明るい声にかき消されてしまった。

『嵐か。おはよう。そ、こいつ。栗原　こもも。』

『おお、よろしく。こももちゃん。俺、佐倉　嵐。』

『よろしく、佐倉君。』

佐倉君はさわやか系のスポーツマンて感じ。

『そんなあ、嵐でいいよ。』

佐倉君は人懐っこい笑みを浮かべた。

『え？それじゃあ、あ・・。』

『だめ。』

突然、古句に肩をつかまれ引き寄せられた。

『え？』

どうしたの。なんかまた怖い顔してるし。

『嵐もこももって呼ぶな。』

まったく何言ってんのこいつ。小学生？

佐倉君はそんな古句をきょとんとした顔で見つめていたけれど、やがてブッと吹き出した。

『何、古句。焼きもちかよ。なんだあ、そうか。こももちゃんは古句のか。残念だな、ちょっと気になってたのに。』

え？焼きもち？何を言ってるのこの人。

『そう、変なちょっかい出すやつがいたら、教えて。あと、こももじゃなくて栗原ね。』

古句まで何言ってるの？

『おっけー。じゃあ、改めてよろしく。栗ちゃん。俺のことはサクラちゃんて呼んでね。こっちも結構気に入ってるんだ。』

『うん。なんだか、よく分からないけど、よろしくサクラちゃん。』

差し出されたサクラちゃんの大きな手を私は、そっと握った。

第二話：湯守の友達（後書き）

結構ラフに少女マンガっぽく書いているので、読みにくかったらごめんなさい。

第三話：王子か悪代官

藍色の髪から滴り落ちる一滴の滴。

あなたは、本当に不思議な人ですね。雨の中、散歩に出かけるなんて。

いや、そんなに悪いものでもない。どうだ、今度は一緒に出かけないか。雨もとうに上がってる。

夜の山は真っ暗で、頼りになるのは、あなたの緑の瞳だけ。

闇に浮かぶ緑色の灯りだけは見失っちゃあいけません。

やがて、現れた白い光が差す場所。

空にはぽっかりと丸い月。雲ひとつございません。

あなたはもう一度、呟きます。

雨の中の散歩も悪くない。晴れたときの二人一緒の散歩を想像できるから。

ああ、そうですね。あなたはそうゆう方でした。

気分がいいので、今夜はゆっくり月を眺めていましょうか。二人で肩を並べてね。

＊

部屋中に、足の踏み場もない程積み上がった本の山。本はどれも古くて色あせている。小さな窓から差し込む光が、空中に浮かぶ大量のホコリを浮かび上がらせる。本当にこんなところに人がいるのだろうか。

『国治さ～ん。お茶持ってきましたよ。どこですか？』

私は少し面食らいながら、そろりそろりと部屋に入った。

私の声が静寂に吸い込まれてから少し経った頃、部屋の隅でごそごそと音がしたかと思うと、大きな音を立てて、山が一つ崩れた。

『ぎゃあ。』

悲鳴が上がったかと思うと、しばしの沈黙が流れた。

少しすると、崩れた本の間から長い手がにゅっと伸びて、ゆっくり本をどけ始めた。

その内、茶色い頭が見えたかと思うと、国治さんが顔を出した。

今日は眼鏡をかけているが、今の事故のせいか若干曲がっているよ

うに見える。

『ごめん、ごめん。調べ物をしていたところで。』

国治さんは、頭や顔に付いたホコリを払いながら、言った。

『いえ、古句に聞いたら仕事をしてるって言うから、お茶でもと思って。すいません、邪魔しちゃったみたいですね。』

『お茶。いい響きだ。やっぱり女の子が来ると違うね。古句なんて一度も淹れてくれたことないよ。邪魔だなんて。狭いけど、ゆっくりしていってね。』

国治さんが、にっこり笑ってそう言ってくれたけれど、この部屋にゆっくり座れるスペースなんてなさそうだ。

『国治さんのお仕事って、何か聞いてもいいですか?』

私は、持ってきたお茶を国治さんに渡すと、そこに立ったまま尋ねた。

『ああ、ちょっと文章を書いてるんだ。』

国治さんは曖昧な答えを返してきた。

『それって、もしかして作家さん?』

旅館に眼鏡に本の山に文豪。私の頭に妙なキーワードのつながりが浮かんだ。

『まあ、一応。』

国治さんは少し照れくさそうに言った。遠まわしに言ったのは、恥ずかしかったからみたいだ。

『ええ～。すごい。ええ、どんな本を書いてるんですか？』

『えっと、今書いてるのは、「闇に響く音」っていうやつだけど。』

え？それって・・・。

『ま、まさか。国治さんのペンネームって嵯峨野　伊織ですか？』

『うん。』

『めちゃめちゃ有名じゃないですか。嵯峨野　伊織っていったら、幻想文学の天才じゃないですかぁ。私、大ファンですよ。』

興奮で思わず、声が裏返る。

『そ、そんな大層なものじゃないよ。』

国治さんの声が小さくなる。

『すいません、興奮しちゃって。でも、うれしいな。憧れの作家さんがこんな近くにいたなんて。』

『いや、こんな旅館だからね。ネタが尽きないんだよ。』

国治さんはしみじみと言った。

た、確かに神様が来る温泉なんてそうそうないものね。

『恥ずかしいから僕の話はこれぐらいにしてもらっていいかな。そういえば、こももちゃんは新しい学校はどうだった？』

ちぇ、話題変えちゃった。もう。まあ、いいや。また、じっくりね。それに誰かに聞いてもらいたい。

『楽しそうな学校でしたよ。担任の先生も優しそうだったし。ただ、ちょっと・・。』

『え、何なに？』

さすが作家だけあって、国治さんはすごい食いつきいい。私はため息をつくと、今日学校で起きたことについて話し出した。

＊

『はい、注目。こちら今日からこのクラスに入る栗原　こももちゃん。通称は栗ちゃん。みんなよろしくな。』

朝のざわつく教室に入ると、佐倉　嵐ことサクラちゃんは、私を教

卓の前に立たせると、大きな声で言った。

一瞬教室は水を打ったように静かになった。皆の視線が私に刺さるのが分かる。が、がんばらねば。

『あ、あの。今日からお世話になります栗原　こももといいます。えっと、これから仲良くしてください。』

静寂の中、私のか細い声が、響く。え？反応なし？

一瞬うなだれかけた私の耳に、ピュウ～っと高い口笛の音が聞こえた。

『え～。転校生って女の子だったんだぁ。しかも、かなりかわいい。』

『俺もタイプ～。』

『栗ちゃんはどこから来たの？』

『こももちゃんなんて、かわいい名前ね。』

矢継ぎ早に声がかかる。

どうしよう。

『はいはい。皆クールダウン。栗ちゃん驚いちゃってるよ。ウチは、転校生を怖がらせるようなクラスじゃないよね？』

戸惑っている私を気遣って、サクラちゃんが、助け舟を出してくれ

た。おどけた調子で、皆をいさめる。まさにムードメーカーって感じ。

『ないにきまってんだろ。お前こそ、ちゃっかり株上げようとしてんじゃねーよ。抜け駆けは反対で～す。』

何人かがブゥーブゥーとはやし立てる。

な、なんか。すごいノリのいいクラスだ。

『栗ちゃん、お弁当一緒に食べよう。持ってきた？』

昼休みになると、女の子達が、そばにやってきた。

『うん、ありがとう。ちょっと待ってて。』

お弁当は雪さんと花さんが作ってくれた。えっと、確かかばんの中にいれたはず・・。ごそごそとかばんを探っていると、後ろから私のお弁当を持った手がにゅっと突き出された。

『おい、こもも。テーブルの上に忘れてたぞ。抜けてるよなお前。そんなんでよく編入試験通ったな。』

聞き覚えのある声と憎まれ口に私は後ろを振り返った。

『余計なお世話よ。』

振り返ると、緑の瞳がこっちを見下ろしている。

『ん。雪さんの弁当は絶品だぞ。』

古句は、私にずいとお弁当を差し出す。

『あ、ありがとう。』

私が、お弁当を受け取ると、古句はサクラちゃんたちがいる方へ帰っていった。

いい奴な気もするんだけど、なんか一言多いんだよね。

古句がいなくなると、突然肩をガクガク揺すられた。

『え、ちょっと栗ちゃん。今の何？千家君とどうゆう関係？』

私をお弁当に誘ってくれた子達の中の一人が、顔をずいとこちらに出してきた。

『え、どうゆうって。古句の家に居候させてもらってるんだけだよ。』

な、何事？

私が、そう答えた直後、

『きゃ～。』

周りにいた子達が声を上げた。

『ちょっと、これは重大ニュースよ。』

『え？なんで？』

何をそんなに興奮してるの？

『ちょっと、栗ちゃん。知らないの？千家君て、わが校の難攻不落の王子よ。顔良し、頭良し、性格良しと三拍子揃った上にスポーツも万能なのよ。』

『王子？性格良し？』

聞き間違えかな？

『どんなにかわいい子から、告白されてもＯＫしないの。』

『な、なんて贅沢な。』

やっぱり、最低。

『いいな、栗ちゃん。王子と一つ屋根の下だなんて。』

『私なんて、同じクラスになれただけで、鼻血出そうになったのに。』

は、鼻血・・。

『とにかく、栗ちゃん。皆王子のファンだから、私生活のこととか教えてね。』

『うん。うん。』

いつの間にか、私の周りには、クラス中の女の子が集まり、手を胸の前に合わせてうなづいている。うわ～。断れません。

『が、がんばります。』

私は小さな声で答えた。

＊

『うわあ。それは、すごいね。』

話終わると、国治さんは、感心したような声を上げた。

『もう、なんで古句なんかが。』

また、ため息をついてしまった。

『いや、古句からはそんな風な話を聞いたことがないから、新鮮だよ。はは、王子か。』

『悪代官の間違えじゃないですかね。』

『ふ～ん。悪代官ねえ？』

国治さんではない、低い声がした。え？冷や汗が頬を伝う。

『そろそろ、客が来るから、親父を呼びに来たんだけど、いいこと聞いちゃった。』

こ、怖くて後ろ向けないよ。

『ああ、もうそんな時間？じゃあ、僕仕事があるから。こももちゃん、お茶と面白い話ありがとう。』

そう言うと、国治さんは立ち上がって出て行った。

え、置いていかないで下さいよ。恐る恐る、古句の方に向き直る。

『で、面白い話って何？』

例の笑みを浮かべながら古句が、近寄ってくる。

『べ、別に。古句には、関係ないよ。』

『何それ。ムカつく。』

古句は、そう言うと私の腕を強く掴んだ。

『痛い！』

私は悲鳴を上げた。

『今夜は、客が来る。風呂は、食堂の横の小さいのを使え。夜は気をつけろよ。』

それだけ言うと、古句は私の腕を離した。掴まれたところを見ると、赤い鎖のような跡が腕の周りについていた。

『・・・。これなに？』

普通に掴んでできる跡ではない。

『知らなくていい。変な感じがしたら、そっちの腕を顔の前にかざせ。』

よく分からないけど、古句の顔がひどく真剣だったから、私は素直に頷いた。

第四話：神様

真っ白いシーツに映された藍色の髪が薄められて、ゆらゆら揺れる。まるで、ローソクに燈った青い炎のよう。

あなたは、本当に朝が似合わない方ですね。夜をそのまま切り取ったようなあなたですもの。

眠そうな顔が、またかわいらしい。急に一緒に洗濯をしようだなんて、慣れないことをおっしゃったのは、あなたですよ。

お気に入りの若草色の浴衣ですか？あちらに干してありますよ。今日は天気が良いですから、きっとすぐに乾きますよ。

そう、心配なさらなくても、お嚙子が聞こえてくるまでには必ずパリッと乾きますよ。

まるで、子供のようですね。お祭りの日に朝から興奮しているなんて。

はいはい、分かっておりますよ。綿菓子もカキ氷もたこ焼きも二人で半分にいたしましょう。

わたしですか？そうですね。お祭りから帰って後に、二人で線香花火をしとうございます。

夜を切り取ったようなあなたですもの。あのオレンジ色の光の玉が、よく似合うはずでしょう。

＊

笹の葉の上に乗った鮎を見たとき、思わずぎょっとした。鮎なんて食べたことがないし、高級なイメージがしていたから。

『神様はね、人間と同じように現金で払う宿泊料以外にお土産を持ってきてくれるんだ。今日はこれ。』

国治さんは、美味そうにビールを飲むと、鮎の塩焼きをつつきながら話してくれた。

『お土産？』

私もおそるおそる、鮎の手を伸ばす。えいっとばかりに口に放り込む。・・・。う～ん？確かにおいしいけれど。

『はは、別にすごくおいしいって訳じゃないだろう。鮎は基本的に香りを楽しむ魚だからね。川の岩肌に付いている藻類を食べるから、とても良い香りがするんだよ。ほら、ゆっくり鼻で息をするように食べてごらん。』

微妙な私の顔に気が付いた国治さんは、笑いながら言った。

言われた通りにしてみると、爽やかな風味が私の口に広がった。

『いい香り。』

私は呟いた。すると、横槍が入った。

『無駄なことするなよ、親父。こももに鮎のおいしさが分かるわけないだろ。』

声の主の方を向くと、涼しい顔をして鮎をつついている。く、悔しいけど、鮎が似合う。

『悪かったわね。それより、国治さん、お土産っていつもこうゆうものなんですか？』

『う～ん、そうだね。大体、魚や山菜とか自然のものだね。神様っていっても、結局は動物の中で特に「気」の強い類のものだからね。元々力のあった動物が、何百年も生きているうちに、昔の人々がそれを崇めだして、徐々に力を増したって感じかな。温泉は、神様達の「気」を強めることが出来る場所でもあるんだ。雪さんや花さんは、八百万の神としてはまだまだ弱いからうちで働いているんだよ。』

『は～あ、なるほど。リスの神様なんて、聞いたことないもの。メジャーじゃないのね。じゃあ、今日のお客さんは、河童とか？』

小さい頃、「河太郎」っていう絵本の中で、河童が、女の子にヤマメをあげていた。そんな感じかな。

『ご名答。今日のお客は、隣町の川の河童だよ。』

国治さんは、にっこり笑った。さすが、嵯峨野　伊織。詳しいな。

『あの、やっぱり私が近づくのって危険でしょうか？』

『うん。見てみたい気持ちも分かるんだけどね。やっぱり、こももちゃんは、亨さんから預かっている大事な娘さんだしね。』

亨って私のお父さんのこと。だけど、なんでお父さんと国治さん知り合いなんだろう。やっぱり、国治さんが嵯峨野　伊織だってこと知ってたのかな。う～ん。今度聞いてみよう。

『親父の言う通りだ。今日はやめとけ。あんまり、あの水神は、いい感じがしなかった。』

古句の瞳が、さっき私の腕を掴んだ時みたいに真剣に光っている。

そんな顔されたら、なんだか不安にあるよ。私は、さっきついた鎖状の跡がひりひりしてきた。

＊

『ぐごー。ん、がー。』

襖を挟んだ隣の部屋からは、ものすごい音量のイビキが聞こえてくる。本当に冗談にならない位うるさい。

こんなイビキ、古句の端正な顔からはとても想像できない。クラスの子達に話してもきっと信じてもらえないだろう。まあ、それ以前に隣に部屋だなんて、怖くて言えるわけない。

それでも、ちょっと感謝もしている。昨日の夜もそうだったが、静まり返ったこの部屋にいたらなぜか涙が出そうになった。けれど、すぐ古句のイビキが聞こえてきて、びっくりしたら涙は乾いてしまった。寂しくて泣き明かすなんて、絶対にしたくなかったから、少し古句には、感謝している。

泣きたくないと思う。お父さんたちと別れたことで、強くなりたいと思う。

それにしても、人間の順応性高いこと。ものすごいイビキの中で、二日目にして私は、ゆっくりと眠りの世界に落ちていった。

真夜中、私は妙な気配に目が覚めた。背中が、チクチクと痛む。なんだろう。聞いたことのない声が頭の中に響く。

『おや、旨そうな子だ。旨そうな「気」の匂いがする。』

え？飛び起きようとしたが、いつの間にかうつぶせの体勢になっており、背中の上に何か重いものが乗っていて動くことが出来ない。

『・・・。』

声を上げようとしたが、何かで締め付けられているみたいに喉が開かず、息だけが漏れる。

落ち着け。多分、古句が、予想した通りのことが起きているのだ。そうだ。古句。

私は、昼間、古句に掴まれた方の腕を、そろそろと背中に回した。ギャッと声が上がり、背中が軽くなった。

『痛い。痛い。おかしいな。おかしいな。』

声が大きくなる。

『早く食べなくちゃ。』

そのとたん、背中に激痛が走った。喉の呪縛が解ける。

『痛い。』

暗い部屋に私の悲鳴が上がった。

痛い。力が抜けていく。体が、氷のように冷たくなっていく。どうしよう。

その時だった。緑色の光が、部屋中に弾けたと思うと、ギャッとさっきより大きな悲鳴が、上がった。

『こももから、離れろ。』

古句？光がまぶしくて、よく見えないが、そこに立っているのは、

多分古句だろう。

しばらくすると、また部屋は真っ暗になった。電気が、パチリとつけられ、蛍光灯の灯りが部屋を満たす。

『こもも、大丈夫か。』

古句は、布団にうつぶせに倒れている私の横にしゃがんだ。

『古句？今の何？』

声が震える。なんとか、起き上がると古句が心配そうに私の目を覗き込んだ。

『河童だ。お前の「気」を食いにきた。おい、どこが痛い？』

『背中。ひりひりする。あと、寒い。』

『ちょっと、見せろ。』

古句が、いきなり私の浴衣の襟を掴んだ。

『え？ちょっと。』

私が、声を上げた時にはもう肩まで浴衣を下ろされていた。蛍光灯の光のせいで、肌がやけに白く光る。背中に視線を感じる。

『うん、やっぱり。こもも、ちょっと痛いけど我慢しろ。』

そう言って、古句は私の剥き出しになった肩と首筋に手を押し当て

た。

その瞬間、熱い痛みが、肩に首筋に走った。

『あつっ。』

痛みの後、体がじんわりと温かくなってきた。

『どう？』

古句は私の襟を掴むと、元の位置に戻しながら、尋ねた。

『うん、温かくなってきた。何したの？』

『ちょっと、マーキング。これは、俺のだよってゆう。とりあえず、あいつはもう襲ってこないよ。』

『何それ、ふざけないでよ。』

『ふざけてないよ。こうするのが一番なんだ。神は、神同士の争いを好まないから。先客がいれば、大抵の場合退くんだ。』

『はあ。』

『こんなにすぐ襲ってくるとは思わなかったから、ちょっと驚いた。お前、よっぽど旨そうな匂いがするんだな。』

なによ、その感心したような言い方。さっきから、旨そう旨そうってなんかいかがわしくて、やだ。ホントに怖かったのに。

『まあ、そうと分かったら、早めに対策とるから。まあ、今日はもう寝ろよ。じゃ、お休み。』

私の恨みがましい目に気が付いた古句は、早口で言うと出て行こうとした。

『待って。』

私の声に古句は立ち止まった。こちらを向かないのは、怒られるかと思っているのだろうか。

『・・助けてくれて、ありがとう。』

『ああ。電気消すぞ。』

古句は、後ろを向いたまま、手をひらひらと振っただけで、部屋の電気を消した去っていった。

布団に仰向けになると、私は息をゆっくり吐いた。

さっき、古句の耳がちょっと赤かった気がする。

もしかして照れてたのかな?まさかね・・・。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5409d/

湯守の恋

2010年10月10日17時59分発行